

大学図書館におけるリザーブ・ブック制度 The Reserve Book System in University Libraries

榊 井 知 子

Tomoko Masui

Résumé

This article was originally submitted to the Japan Library School as a report of the summer practice work at the International Christian University Library in 1962.

The university library has two functions; education and research. And the library can assist, in many ways, the university give a full play to its educational functions. The reserve book system is an example.

The reporter discusses the origin, significance and necessity of the reserve book system in general and describes the system at the International Christian University Library.

The reporter not only takes up some of the problems derived from the reserve book system but points out the factors which arrest the growth of the system in Japanese university libraries.

(1963 graduate from Japan Library School)

I 大学教育と図書館

A 大学教育の目的と図書館の機能

B 図書館の教育的機能

II リザーブ・ブック制度

A リザーブ・ブック制度の意義

B リザーブ・ブック制度の必要性

C ICU Lib.におけるリザーブ・ブック制度

D リザーブ・ブック制度の効果的運営

E リザーブ・ブック制度における教授と図

書館との協力

F リザーブ・ブック制度の諸問題

III 日本の大学図書館におけるリザーブ・ブック制度実施を妨げる諸要因

I. 大学教育と図書館

A. 大学教育の目的と図書館の機能

学校教育法第52条に大学の目的を定義して、「大学は、學術の中心として、広く知識を授けると共に、深く専門の学芸を教授研究し、知的および応用的能力を展開させることを目的とする」と示されているように、大学は教育機関であるとともに研究機関である。

このような機関である大学に奉仕する大学図書館は、当然、教育および調査研究活動の二つの目的に寄与する機能を持たなければならない。大学教育に於ける大学図書館の重要性について、Keyes D. Metcalf は次のように述べている。「世界中の多くの大学の中で、学生こそは忘れられた人である。学生のために、よいサービスをすることは、それ程、費用のかかることではなく、どの大学に於ても、これこそ教育計画の基本である。大学が、よい図書館を持たないならば、しかも教職員や大学院学生だけでなく、学部 of 学生たちにも、つまり全学に充分サービスを与えるような図書館を持たないならば、その大学は本当の意味で偉大な大学とは言えない。」¹⁾ また、もし図書館が、その機能と奉仕を、現代の社会経済および教育の発展に適応させることに成功させようとするならば、大学図書館の目的は定期的に検討されなけれ

ばならない。図書館の目標は、一般的に大学の目標と同様に、静止的ではなく、教育の原理と実際の動向とに合わせて行かなければならないのである。

B. 図書館の教育的機能

前にも述べたように、大学図書館には、調査研究的機能と教育的機能がとがある。ここでは、そのうちの教育的機能について考察してみることにする。

大学に於ける学習課程は、次のような幾つかの教授法によって進められている。すなわち、講義、復習、セミナー、野外研究、実験、テスト、視聴覚的方法、研究的読書などである。学生は、この研究的な読書によって、自分の進むべき課程の学科内容の大部分を習得するのである。この種類の読書の多くは、図書館で行なわれるものである。

20世紀に入ってから、読書とか研究のために、大学図書館の利用というものが非常に増大した。Paul Bixlerの言葉に依ると、これは、単に出版される図書の数が増えたとか、学生数が増えたとかいうのではなく、その成長の根本には、大学図書館とカリキュラムおよび新しい教授法との関係が密接になったということがある。19世紀に於ける大学のカリキュラムは、教科書による教授法をとっていた。しかし、現在の大学のカリキュラムは、過去のものとは大変ちがってきている。学生は、社会科学、自然科学、人文科学について教科書だけでは済まされなくなり、広く読むことを期待されているのである。

ここにおいて、図書館というものは、「教育計画実施のための実験室として、あるいはまた教室の延長である」²⁾と考えられている。

Guy R. Lyleに依ると、図書館利用には、三つの段階がある。³⁾すなわち、第一に教科書の段階、第二にリザーブ・ブックの段階、および第三に自主的な研究の段階、と呼ばれるものである。⁴⁾1954年の春と冬にダートマス大学に於て、図書館における学生の読書調査が行われた。これに依ると、次のような結果が出た。解答者の63パーセントが専ら自分の教科書を使用して勉強していた。また、33パーセントが図書館の資料を使っていた。そのうち、 $\frac{1}{2}$ がリザーブ・ブックを使用していた。この調査からもわかるように、第一の段階に於ける図書館利用が最も多く、図書館は単に静かに勉強するための避難場所のような性格を持っているに過ぎない。図書館の教育的見地からすると、第二、第三の段階に移行させることが必要となってくる。

第二の段階であるリザーブ・ブックについては、この

論文で後述するので、第三の段階について、先に述べることにする。

この段階の図書館利用というものは、図書館というよりも、実験室を連想させるところの教授法の種類によってもたらされる。教室での講義を受身的に聞いているのではなく、学生はその教育への積極的な参加者となり、教授は単に案内者あるいは助言者となるのである。このタイプの教授法では、学生は自分の勉強に必要なインフォメーションを選び、組織し、評価するために図書館にやってくる。この段階にまで引き上げるためには、次にあげる2つのことが前提条件となる。

(1) 学生たちが、図書館の資料を使って自主的に研究するように、教授が動機づけをすること。¹⁾

(2) 適当な図書館利用指導および書誌的な tool についての指導をすること。等である。

教育的機能の中の、この図書館利用指導について、Keyes D. Metcalfは、次のように述べている。大学図書館の「サービスの第三は、参考業務に関することである。私の見解では、参考係は、学生や教授に必要な知識を供給するのではなく、彼らが自分自身で必要とする本を見つけ出せるように援助することが、その任務であると思う。大学教育の非常に大切な課題の一つは、学生が図書館というものの利用方法を、すなわち、図書館の使い方を覚えて社会に出ることであると私は信じている。大学図書館職員は、ちょうど教授たちが講義によって学生を指導するように、学生に図書館の利用方法を教えることによって、大学教育の一環にたずさわっていると考ええる。」⁴⁾

この図書館利用に対する案内および指導の方法には、単なる案内を目的とした新入生を対象とするオリエンテーションと、専門課程に入る3、4年生の各学部学生、および大学院に進学する学生を対象とする、学習活動の援助を目的としたガイダンスとが考えられる。すなわち、前者の新入生に対するオリエンテーションに於ては、図書館の利用に関する基礎的事項が指導されなければならない。後者のガイダンスでは、オリエンテーション的なものは必要でなく、学習目的にそった援助が必要で、特に資料への接近法に重点が置かれなければならない。

II. リザーブ・ブック制度

A. リザーブ・ブック制度の意義

大学に於ける教授法が変ってきたために、学生は非常

に多くの図書を読むことを要求されるようになった。このことは前にも述べたが、そのため、クラスの全員が同じような図書に殺到するので、そこに、ある種の利用制限が必要となった。そういう図書は、貸出デスクの近くの限られた書架上に置き、限られた時間だけ貸出されるようになった。これが、リザーブ・ブック制度の起りである。最初にこのような制度が試みられたのは、19世紀末ハーバード大学図書館に於てであった。

このリザーブ・ブック制度とは、教師の講義に関連して学生に必ず読むべきものとして指定された文献を図書館に於て別置き、独自の運営方法によって学生に利用させる方法である。「レファレンスや自由接架式が、図書館それ自身の方法であるのとは違って、リザーブ・ブック制度は、教授の方法そのものである。」⁶⁾すなわち、図書館側が単独に行なうところの一般の図書館サービスとは、やや性格が異なり、大学に於て行なわれる授業上の要求に応じて、図書館の中に生れ、発達してきた方法である。従って、図書館側のみでこれを設置し、運営することは出来ない。教授との全面的な協力があって初めて出来るものである。国立大学図書館改善要項および、その解説(昭和28年)の中で、指定図書室の項には次のように書かれている。「教室の講義に関連して、学生に対し必読を求められた文献を図書館内に別置する図書室で、図書館は当該教官の要請に基づいて、これらの図書を一定期間ここに備えつけ、その期間は貸出を禁止するが、この指定図書は、時には同一図書を数部備え付ける必要も生ずる。このように講義に直接関連をもつ学生の勉強への便宜を考慮することにより、教官、学生、図書館の一体的関係が確立される。」

東京大学などでは、各講座の教授が図書館に指定し、その指定書は、指定図書閲覧室に並べられる。この場合の指定書は、筆者がここで取り上げているリザーブ・ブックとは根本的に異なり、いわゆる基本的図書を半永久的に排架しているものである。この中には、教授の選んだものと図書館で選んだものとがある。リザーブ・ブック制度のリザーブ・ブックが講義内容に応じて流動的に変化するのに比べて、この場合の指定書は固定的なものと言ってもさしつかえない。

また、公共図書館などで、リザーブ図書と言う場合も、このリザーブ・ブック制度のことではないので注意する必要がある。すなわち、公共図書館などに於て、求められた図書が貸出中の場合、何回も読者に無駄足を踏ませることを除くため、予約をとっておき、この予約さ

れた図書が返却された時、連絡するようにしている。この予約のことをリザーブと呼んでいるのである。

Guy R. Lyle は次のように言っている。「最近の大学教育に於て、広く採用されている講義並びに Reading assignment の方式の下にあって、教師が学生に読むことを要求する多くの本を、図書館は一般書架から取出して、別の棚、或いは別室にまとめて排架する必要に迫られる。そして、これらの本は、多くの学生が限られた期間に、同じ本を読まなければならないところから、大抵の場合、複本が準備される。更に、教師は、しばしばこれら必読書以外に広く補助的な本も、リザーブの棚に置く。」⁹⁾

B. リザーブ・ブック制度の必要性

リザーブ・ブック制度の必要性について、Louis Round Wilson 等は、「教育手段としての大学図書館」⁷⁾という章の中で述べている。ここで、図書館の教育的機能を強調し、図書館を教室においてなされる授業の延長としてみている。すなわち、教師が教室で開始し、指導していく教育活動を更に押し進めるものが図書館であり、そして、図書館は、この機能を達成するために種々の準備とサービスを必要とするが、その中で、リザーブ・ブック制度を第一にあげている。

また、Keyes D. Metcalf は、「閲覧者に対する第一のサービスは、教授や学生に本の貸出をすることである。第二には、近代的大学図書館としての指定書制度である。」⁸⁾と述べて、リザーブ・ブック制度の必要性を指摘している。

A. F. Kuhlman は、「何故、リザーブ・ブック制度が必要となったか」⁹⁾と題する章の中で、次のような点をあげて、その必要性を述べている。

(1) 大学で扱う主題に関する知識は広くなり、変化に富んできたので、殆んど科目は、学生が買う本だけでは充分でなくなった。そして1冊の教科書の時代は過ぎて、その代りに図書館で多くの本を利用する時代となってきた。

(2) 社会科学に於ては、もし学生が、その急速に変化していく社会の状況を理解しようとするなら、次々と出版される新しい資料に、広い範囲にわたって接近することが重要となってくる。

(3) Mass education は、教科書をたどって詳説していく教授法を挫折させ、その代りに講義とか、広範囲にわたる指示された読書、および図書館での研究というものが行われるようになった。

大学図書館におけるリザーブ・ブック制度

これら諸要因により、学生が同じ資料に、同時に集中するという現象が起ってきた。このため、リザーブ・ブック制度が必要となってきたのである。今日の大学教育に於て（特に社会科学、人文科学の分野に於て）、このリザーブ・ブック制度を実施して、はじめて効果的な教育が出来ると言っても過言ではない。

C. ICU Lib. に於けるリザーブ・ブック制度

ICU Lib. に於ける種々のサービスの中で一つの特異な存在となっているのが、このリザーブ・ブック制度である。これは、図書館創立の時から実施されてきた。日本の他の大学では、なかなか実施困難であるところのこの制度を行なうことが出来たのは、次のような好条件があったためと考えられる。まず第一に、ICU の教授法に関係する。ICU では、語学を除いては教科書を殆んど使っていない。そこで、教師は講義のアウトラインを作って、あらかじめ教授会の承認を得なければならない。これは、ICU の一つの制度ともなっていて、教師は必ずアウトラインを作る。このアウトラインには、ビブリオグラフィをつけることになっていて、この中から必ず読むべき本を指定するのである。これがリザーブ・ブックである。このように、学校の授業は、このリザーブ・ブックと密接な関係を持っている。読んだ方がいいという程度のものではなく、読まない単位もとれないことがあるということが起る。ICU に於てリザーブ・ブックがよく利用されるということは（表1参照）、これを読むと読まないのでは、はっきりと効果が違ってくるような教授法がとられているためである。そして、「教室学習と図書館学習の同時性」¹⁰⁾ が保たれている。すなわち学生は教室で講義を聴くのみでなく、相当量の Reading assignment を課せられ、これを読んだ上で、ディスカッションに参加し、レポートを提出する。試験もノート以外に、これらの資料に基づいてなされる。ICU では、教育は教授と学生の間でのみ行なわれるのではなく、この両者の間に図書館が重要な位置を占めている。

表 1. SURVEY OF RESERVE BOOK USE (1)

Month	No. of withdrawals	Average no. of withdrawals per day
April (17 days)	755 volumes	44.4 volumes
May (25 ")	1,294	51.7
June (19 ")	1,032	54.3
July (4 ")	221	55.2
(65 days)	3,302	50.8

第二に、ICU には外人教師が多いため、教授側の図書館およびリザーブ・ブック制度に対する理解と協力が比較的スムーズに行っているということも、この制度を実行していく上に非常に好都合である。

第三に、ICU Lib. の基本方針として、中央図書館制を採っていることが、この制度を実施可能にしている。研究室などに資料が分散していると、図書館が中心となって実施していくことは不可能である。

最後に、学生数が少ないということが挙げられる。このため、それぞれのコースを履修する学生数（表2参照）も少なくなり、同一図書を同一期間に要求するものが、それほど数に昇らない。複本も、あまり多くは必要とせず——ICU では、一応 8 人に 1 冊の規定がおかれている——予算面から考えても実現可能である。管理の面からみても、現状では、それほど混乱を呈していない。

表 2.

NUMBER OF RESERVE BOOKS, COURSES, FACULTY MEMBERS & STUDENTS BY DIVISIONS, SPRING TERM, 1961

Divisions	No. of Reserve Books		No. of Courses	No. of Fac. Members	No. of Students
	Vols.	Titles			
Social Sci.	510	393	26	22	876
Humanities	323	304	14	8	553
Natural Sci.	16	16	4	3	17
Language	211	51	9	5	112
Physical Ed.	76	49	2	2	333
Total	1,136	813	55	40	1,891

ここで、ICU Lib. に於て、リザーブ・ブック制度が、どのように行なわれているかについて、その実際に則して述べることにする。

まず、各学期開始前にリザーブ・ブックの準備のために、次のような資料を用意する。開講コース一覧表およびクラス時間割を学部長室から入手する。また、図書館員は、リザーブ・ブックの依頼状 (Form 1 参照) を教授に送る。その後、各コース担当教授から、講義の概要およびリザーブ・ブック・リスト (Form 2) を入手する。このリザーブ・ブック・リストは、予め図書館側で書式を作成して担当教授に送り、クラス開始 2 週間前までに提出を求めるようにしている。

以上の資料をもとにして、図書館側では、リザーブ・ブックを一般書架から集め、白色のブックカードを黄色

Form 1. 依頼状

To Faculty Members:

We would like to remind you of Reserved Book Lists for the coming new term. Would you please send the list to the Circulation Desk at least two weeks before the books are to be used?

Tane Takahashi
The Library

Form 2

RESERVE BOOK LIST

Date:

Name of the Instructor:

Course Number and Title:

Beginning date:

Closing date:

Loan Period: (2 hour, 3 day, etc.)

Estimated enrollment:

Call No.*	Author	Titles	No. of Copies.
* If possible, please indicate the call no. of each book.			

のブックカードと取り換える。ICU Lib. では、リザーブ・ブックだけ閉架式を採用していて、貸出デスクの後に別置している。その中は、教授名のアルファベット順に排列し、特に幾つかのコースで共通に要求されるものの多い場合には、学科別にまとめて置かれている。例えば、語学科は、そのオーバーラップが多いので、800 台はまとめて、請求番号順におかれている。

学生が、リザーブ・ブックを利用する際には、デスクに置いてある visible index によって確かめて請求する。リザーブ・ブックの貸出は、昼間 2 時間ならびにオーバーナイトの利用が許されている。この他、ICU Lib. では、学生数、要求の度合、科目の性格、宿題の出し方等から考えて、2 日間、あるいは 3 日間の貸出期限も定めている。リザーブ・ブックの over-due は、一般図書

よりも、他の利用者に非常な迷惑をおよぼすということから、延滞料も高い。すなわち、一般図書の延滞料は、1 日 5 円であるのに対して、リザーブ・ブックの 2 時間制およびオーバーナイト制は、期間後 1 時間につき 30 円、1 日制および 2 日制、3 日制は、期間後 1 日につき 30 円と規定されている。

リザーブ・ブックのための特別な予算は計上されず、全体の予算の中に見込まれている。ICU に於ては、コースの内容の変化に従って、リザーブ・ブックも変っていく。すなわち、リザーブ・ブックに指定された図書は、一般書架からリザーブ・ブックの棚に移され、リザーブが解除されると、再びもとの書架に戻されるのであって、リザーブ・ブックは固定的なコレクションではないためである。

ICU のリザーブ・ブック制度で、現在問題になっているのは、次にあげるようなことである。これは、また、リザーブ・ブック制度を実施している大学図書館に共通の問題であるとも考えられる。まず、リザーブの棚にのせる図書の数の問題がある。教授の中には、必要以上に多くの図書をリザーブの棚にのせようとする傾向がある。それに対し、学生は required reading の方に追われて、補助的な図書を読むところまで手がまわらないことが多い。そこで、それらのリザーブ・ブックは利用されないまま、リザーブの棚に置かれていることになる。閉架式であるため、他のコースの学生が必要とする場合には、使用できないし、そのコースの学生であっても、一般書架から 2 週間借りられる方が利用しやすいということが起る。これを少しでも防ぐため、ICU Lib. では、利用状況の調査を、学期中に 1 度もしくは 2 度行っている。それに依ると、1961 年第 1 学期においては、1 回も利用されなかったもの 32%、3 回以下の利用が 26% であった。その結果によって、利用度の低いリザーブ・ブックの数を減らしたり、あるいはもっと学生に利用されるよう教授に連絡するようにしている。

もう一つ問題となっているのは、教授からのリストの提出が遅れるために、クラス開始までに準備が整いにくいということである。リストにあがっている図書が、図書館の蔵書にない場合、購入したり、相互貸借により借りたりするのであるが、日数がかかって、最も必要とされる時にまだ手許にないということになる。また、図書館にある場合でも、すでに他の学生が、2 週間の貸出で借りてしまっている時、返却させて、リザーブの棚に置くのにも時間がかかる。

D. リザーブ・ブック制度の効果的運営

リザーブ・ブック制度を効果的に運営するための必要条件として、A. F. Kuhlman は、次の諸点をあげている。¹¹⁾

(1) 教師は、その講義のスケジュールを発表し、読書が必要とするものを明らかにする。それにより、リザーブ・ブックの係の図書館員は、書誌の事項および請求番号を調べておいて、前もってリザーブ・ブックのプランをたてておくことができる。

(2) 教師は、リストの上で必読書と補助的資料とを区別しておく。これは、複本あるいは貸出期間を定める時に、図書館員の参考となる。つまり、必読書には、複本を充分揃え、補助的資料は、開架式にして、2、3日間というように少し長い期間貸出すようにする。

(3) 教師は、Required reading のための資料が、図書館にあるかどうかをクラス開始前に確かめておく。それと同時に、教師は、宿題が出されるより前に図書館員が、リザーブ・ブックの準備ができるように、早目にリストを提出する。

(4) 必読書に対する複本の数は、その reading assignment の性格、長さ、およびクラスの大きさの点から考慮して、学生達が定められた期間内に要求された図書を読むことが出来るだけの複本を準備する。その数を決定するための、簡単で且つ絶対的な公式というものはない。

(5) あまり利用されないリザーブ・ブックは減らし、それらは、むしろ一般書架から利用させる。

(6) 学生たちが読書によって、最もよい結果を得るためには、Required reading は、講義やディスカッションに合ったものでなければならない。

(7) 単行本のみでなく、フィルム、レコード、雑誌なども、リザーブに入れて、関心を引くものにすべきである。

(8) 学生の読書に対する効果的な動機づけを必要とする。例えば、教師は、各図書について、その重要さと価値を教え、著者についての説明をしたりする。

(9) 大きなリザーブ・コレクションを持つところでは、図書の教育的価値を認識し、また、教育的問題にも関心を持っている専門職の図書館員が必要である。等の点をあげている。その根底には、教師と図書館員との密接な関係が不可欠の条件として存在する。

E. リザーブ・ブック制度における教授と図書館との協力

すべての大学図書館に、リザーブ・ブック制度が必要であるということはない。それが必要であるかどうかは、その大学のカリキュラムと教授法とに関係してくるのである。もし、その大学で、広範な読書リストに依る方法を採用しているとすれば、教科書中心の教授法を採用している大学よりは、リザーブ・ブック制度を必要とするのである。また、大学のカリキュラムの性質によっても影響を受ける。いわゆるリベラル・アーツ・カレッジ (liberal arts college) に於ては、特に、広範な読書が必要とする。このような大学にあっては、リザーブ・ブック制度は、教育と密接な関係を持っている。この間にあって、欠くことの出来ない条件として、教授と図書館の協力ということがあげられる。そのためには、教授は図書館の機能について、また図書館員は大学教育についての相互理解が重要となってくる。それを実現するための具体的な方法としては、次のようなことがあげられる。例えば、教授たちによって図書館に関する委員会を結成することである。そして、そのサービスとか資料の選択等について、教授の意見を聞く。また、図書館員は学部の会合や授業などに参加して、常に大学教育に関心を持ち、授業内容および進行状況を知ることが大切である。直接、授業に出席しなくても、授業内容、進行状況に注意していなければならない。これを怠ると、授業とリザーブ・ブックとの間にずれを生じ、その効果も、あまり期待できないことになる。教授と図書館との協力以外に、学生も図書館に協力することが出来る。授業の進行状況について知るには、学生に聞くのが手取り早い方法である。学生は、しばしば購入してほしい図書を推薦したり、図書館奉仕の改善について進言するのである。

F. リザーブ・ブック制度の諸問題

1. 排架

リザーブ・ブックの排架には、大体、開架式 (Open-shelf system)、閉架式 (Closed-shelf system)、および併用方式 (Combination system) の3種類の方法がある。この中、いずれを採用するかは、個々の大学の規模の大小、学生数、蔵書数、建物のスペース等から考慮し、決定さるべきである。要は Guy R. Lyle も言っているように、「学生の利用に便利で、しかも教育的効果を促進するような排架の方法を選ぶ」¹²⁾ べきである。

a) 開架式 (Open-shelf system)

この方法は、利用者にとっては最も便利で好まれる。必読書と同時に、補助的な資料もこの棚に置かれるので、学生は限られた中から、自分で自由に取り出して選

ぶことが出来る。これに対し、学生数が非常にふえた場合、管理の面で問題を生ずる。すなわち、(1) 紛失あるいは書架上の混乱が生じる。(2) 閉架式よりも自由に、時間的にも制限がなく不規則に取り出されるので、複本も多く必要となり、予算面でも問題となる。(3) 必要以上に図書を独占してしまって、他の学生の利用を妨げ、図書館の正しい利用にとって好ましくない。などのことがある。もっとも、その要求度の高い時期(試験期など)に、紛失などの事故が起りやすい。一方、閉架式に比べて、学生たちが行列入して待つことがいらぬとか、図書館員は、リザーブ・ブックの出納以外の仕事に従事できるということから、リザーブ・ブックの数が多い時は、この方法の方がよいということもある。

b) 閉架式 (Closed-shelf system)

この方法では、時間を限って(昼間2時間とかオーバーナイトなど)、リザーブ・ブックを貸出している。図書館内で読む場合でも普通2時間という制限をしている。この方法の長所としては、リザーブ・ブックが学生に公平に渡るといことである。非常に利用度の高いリザーブ・ブックの場合には、適した方法である。管理の点から見ると、やり易いけれども、いちいち館員によって出し入れされるため、開架式よりは労力と時間を要し、高価なシステムである。しかし一方、学生はリザーブ・ブックのみでなく、一般書架上のその分野の関係資料にも広く目を向けるようになるから、図書館全体の正しい利用という面からみると、教育的に意味があると考えられる。

c) 併用方式 (Combination system)

これは、開架式、閉架式の長所をとり入れた方法で、要求度の高いもののみ閉架式にして、管理を厳重にし、他は開架式にする。これは、大きな図書館において、その要求に合う方法であると考えられる。また、これは、アメリカにおいて、もっとも広く行なわれている方法である。W. R. Lansberg は、大学の指定図書室における文献の読書傾向を調査し、報告を出している。それに依ると、「32の図書館の調査結果は、10館は閉架式、5館は開架式、17館は併用方式を採用し、非常に要求の多い図書は出納台を通して貸出している」¹³⁾とのことである。

この方法にあっては、どの図書を閉架にし、どの図書を閉架にするかが問題となってくる。宿題とか試験のための必読図書は閉架にして、学生が与えられたリストの中から、自分に興味のあるものを選んで読むような場合の補助的資料は開架にするというのも一つの考えである

と思う。しかし、必読図書と補助的資料のタイトルが、学科によっては前者であったり、後者であったりして、重複してくる場合もあり問題となる。

Guy R. Lyle によると、「開架式の場合のリザーブ・ブックの書架上の排列は、(1) 学部によって分け、(2) その各々の中をコース別に排列し、(3) そのコースの中を著者のアルファベット順に排列するのが普通である。」¹⁴⁾と述べている。

2. 複本の問題

限られた期間内に、多くの学生に同じ図書を読ませるためには、当然、複本の問題が生じてくる。どの程度に複本を準備すべきかという基本はない。これは、各大学図書館の実情に基づいて決定されるべき問題である。W. R. Lansberg は、「複本の数は、クラスの学生数、宿題の長さ、読書のために許された期限、複本の価値などによるものである。」¹⁵⁾と述べている。また、彼の調査によれば、¹⁶⁾ 利用度の非常に高い図書に対する複本は、14館のうち、6館が学生10人に1冊、4館は6~8人に1冊、その他いろいろあって、5人に1冊とか8人に1冊、8~10人に1冊というような数がある。また、エール大学図書館では、すべてのリザーブ・ブックを平均2冊ずつ準備し、それ以上を要求する場合は、それぞれの学部で賄うことになっている。

あまり数多くの複本を準備しても、そのコースの担当教授が変わると同時に不用になることがあり、非常に不経済である。ICUにおいても、このことは問題になっている。外人教授が帰国した後、その教授の使用した図書が次に来る教授によって使われることは少ない。カリキュラムにおいて、そのコースは決められているが、教授法は、その担当教授によって異なってくるため、自ずとその参考とする図書も異なったものを必要とすることになる。

指定された部分が短い場合には、その部分だけを複写して学生に配布するという方法もある。この方法は、リザーブ・ブック制度ではないが、その目的とすることは同じである。また、Rental bookの方法により、安い料金で、必要な期間だけ、学生1人ごとに貸し与える方法も、しばしば採られる。

要は、その時の実情に則して、いろいろな方法を採用して、学生に出来るだけ多く読む機会を与えるようにすればよいのである。

3. 予算との関係

リザーブ・ブックの予算の決定は、そのコレクション

の性格による。すなわち、それが流動コレクションであるか、固定コレクションであるかによって、予算の問題も決定される。「流動コレクションの場合、リザーブ・ブックは、その図書館の所蔵する蔵書から抜き出され、それをリザーブ・ブック・コレクションとして別置する方法である」¹⁷⁾から、もし、リザーブ・ブックとして、是非必要とする図書が、その蔵書になかった場合、更にまた、複本を用意する場合は、その都度必要に応じて一般図書購入費から購入する。ICU Lib. の場合は、この方針である。この場合リザーブ・ブック購入のための特別予算を必要としない。これに対し、固定コレクションの場合は、あらかじめリザーブ・ブック購入のための予算を計上し、その枠内で購入された図書で、リザーブ・ブック・コレクションを作る。前にも述べた東京大学などに見られる指定図書はこのやり方で行なわれている。

III. 日本の大学図書館におけるリザーブ・ブック制度実施を妨げる諸要因

日本の大学図書館において、リザーブ・ブック制度を本格的に実施しているのは、前述した ICU Lib. だけであると言っても過言ではない。非常に多くの大学図書館がありながら、リザーブ・ブック制度を行なっているのは、この1館だけであるというのは、どんな原因によるのであろうか。しかし、ここで注意しなければならないことは、アメリカにおいて成功している例が多いからといって、そのまま、すぐにリザーブ・ブック制度を日本の大学教育および大学図書館にあてはめて、その是非を議論しても始まらないということである。そこには、アメリカとは異なった、日本独特の諸要因があり、リザーブ・ブック制度が必ずしも大学教育において最適の方法であると断言することは出来ないが、コースによってはそれは一つの有効な手段となる場合も多いと思われる。

それでは、その実施を妨げている諸要因とは、どんなことであろうか。

まず第一の要因としては、日本の大学の教授法が考えられる。慶応義塾大学の場合について考えてみると、その一般教養課程における講義の大部分は、1, 2冊の教科書を使って行なわれるか、あるいは教師のノートに基づいて行なわれるかのいずれかである。教師は、講義中に参考文献の指示は与えるが、それを読まなければ読まないでも済んでしまう場合が多く、それに基づいて宿題が出されたり、討論したりする類のものではない。こ

の場合でも、図書館の資料と結びついた指示は、殆んど行なわれない。「教室の延長としての図書館」といったものではない。すなわち、大学教育と直接に関係づけられた「教育手段としての図書館」ではない。また、日本の大学の講義は、何日の何時限には、何を講義するということは決っていない場合が多い。1年間の大体の計画はあるにしても、学期前に、その1年間にやることが判っているというような段取りは、全然出来ていないと言ってもよい状態である。このように、リザーブ・ブック制度を運営するにあたって重要な「図書館と教授との協力」も全く見られない。しかし、学科の種類によっては、Required reading そのものも、適・不適があるため、リザーブ・ブック制度を必要としない場合もありうる。

第二の要因としては、大学図書館の利用者の意識が、アメリカのそれとは異なるということが考えられる。日本の大学図書館の利用者、特に教授は、とかく自分の部屋に沢山の図書を持っていたいという傾向があり、図書館の図書を多く借り出してしまっ、て、学生も図書館を利用しているということを忘れがちである。また、このことは、従来、日本の大学図書館が、学生のため、利用のためにあったというよりは、教授の研究のため、保存のためにあったということにもよる。

第三に、大学の規模に起因している。まずその大学の学部構成が多種にわたり、いわゆるリベラル・アーツ・カレッジではない。このため、図書館の蔵書構成も広範にわたり、複本を充分揃えるところまで手がまわらない。その上、学生数はますます増加し、一つのコースを何百人もが履修しているという現象も起っている。このように、大学の規模が大きくなると、開講されるコースの数もふえてくる。このような種々の条件が重なってくると、図書館側としても、予算、人員などの関係から管理面でも実施困難であり、理想としては考えられても、現実には実施不可能となる。しかし、リザーブ・ブック制度は実施できなくても、今までよりは、効果的に図書館を利用させるようには出来るはずである。

I でもふれたように、リザーブ・ブック制度は、自主的な研究に入る前の過渡的な段階にあるものであって、学生が自ら判断して、一般書架から図書を採って研究するようになれば、必要ではないのである。特に規模の小さい大学においては、この制度でなくても、うまく運営されている場合がある。例えば、Vassar College では、各分野の一般書架の近くに主題別にまとめて置く方法、

あるいは更に、一般書架の位置においたままで、指定の表示をする方法が採られている。¹⁸⁾ この方法によると、リザーブ・ブックが図書館内のいたる所に散在し、リザーブ・ブック制度に対する批判の一つともなっているリザーブ・ブック・ルームの混乱、騒音からは免れる。この方法の、もっとも有利な点は、その分野のリザーブ・ブックでない図書も、すぐ近くにあるということである。しかし、これはあくまでも、学生数の少ない、小規模の大学においてのみ実現可能な方法であると思う。

アメリカに於いても、リザーブ・ブック制度に批判的な考えを持つものも少なくない。¹⁹⁾ 教授たちが、リザーブ・ブック制度そのものの起り、目的——同じクラスの学生に、同時に、同じ個所を読ませたいために、必読書だけを集め、ある制限をして利用させること——を忘れ、これ以外の目的のために、リザーブ・ブック制度を利用しようとしてきた。すなわち、必読書以外に、単に、そのコースに関係があり、学生の目に触れさせやすい程度の図書まで、リザーブ・ブックの棚に置こうとした。このように、コースに関係あるものが非常に多くリザーブの棚に置いてあるとすれば、学生はリザーブ・ブックのみの利用にとどまり、それ以上、自主的に図書館全体の資料に目を向けて、その先へ進もうとしなくなる傾向に陥いる。そして、リザーブ・ブック・ルーム、すなわち大学図書館という考えになる危険性がある。

しかし、リザーブ・ブック制度は、大学図書館のサービスの中で、もっとも教育的なものであるということには間違いないと思う。それが、真に教育的機能を発揮するかどうかは、その運営の方法いかににかかっていると言える。つまり、リザーブ・ブックの正しい目的にそうように、それぞれの大学および大学図書館の実情に則して、もっとも効果的な方法を採用して実施するようになればよいのではなからうか。

(図書館学科第 11 期生)

〔編者注〕 本稿は、図書館学科に提出された昭和37年度図書館学実習レポートの一つであるが、序論 (I. 国際基督教大学, II. 国際基督教大学図書館) は割愛し、本論

の部分のみを掲載した。

- 1) Metcalf, Keyes D. “国際基督教大学図書館献館式における記念講演,” 図書館雑誌, vol. 55 (no. 9), 1961. 9, p. 289 (11).
- 2) Wilson, Louis R., et al. *The library in college instruction; a syllabus on the improvement of college instruction through library use.* New York, H. W. Wilson, 1951. p. 282-283.
- 3) Lyle, Guy R. *The administration of the college libraries.* 3rd ed. New York, H. W. Wilson, 1961. p. 145.
- 4) Metcalf, Keyes D. 近代図書館のあり方 <日本私立大学協会. 図書館のあり方について. 東京, 1961> p. 3-4.
- 5) 青野伊予兄. “国際キリスト教大学図書館にみる指定書制度,” 図書館雑誌, vol. 53 (no. 7), 1959. 7, p. 224-225.
- 6) Lyle, op. cit., p. 120.
- 7) Wilson, et al., op. cit., p. 283-284.
- 8) Metcalf, 近代図書館のあり方, op. cit., p. 3-4.
- 9) Kuhlman, Augustus F. “How reserve book collections can be made effective,” in Kuhlman, ed., *College and university library service.* Chicago, American Library Association, 1938. p. 100-101.
- 10) Wilson, et al., op. cit., p. 284.
- 11) Kuhlman, op. cit., p. 102-105.
- 12) Lyle, op. cit., p. 124.
- 13) Lansberg, William R. “Current trends in the college reserve room,” *College and research libraries*, vol. 11 (no. 2), Apr. 1950, p. 121-122.
- 14) Lyle, op. cit., p. 125.
- 15) Lansberg, op. cit., p. 122-123.
- 16) *Ibid.*, p. 123.
- 17) 新坂平次. 指定図書の在り方. <私学研究福祉会, 日本私立大学連盟. 第四回図書館研究集会. 東京, 1960> p. 183-184.
- 18) Branscomb, Harvie. *Teaching with books; a study of college libraries.* Chicago, American Library Association, 1940. p. 122-123.
- 19) *Ibid.*, p. 118-119.